

氏名(本籍)	かわ さき せい じ 川 崎 誠 司 (愛媛県)		
学位の種類	博 士 (教育 学)		
学位記番号	博 乙 第 2429 号		
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	多文化社会における「エクイティ教授」論に関する研究 - アメリカの多文化教育実践を手がかりに -		
主 査	筑波大学教授	博士 (教育学)	谷 川 彰 英
副 査	筑波大学教授	博士 (理学)	井 田 仁 康
副 査	筑波大学教授	博士 (教育学)	甲 斐 雄 一 郎
副 査	筑波大学教授	博士 (教育学)	佐 藤 眞 理 子

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

多文化社会の教育において近年重要性を増している「エクイティ教授」論の理論的検討を行うとともに、日米における授業観察を手がかりに「エクイティ」意識の育成に関する学習の実践的検討を行うことによって、理論と実践の両面から「エクイティ教授」のあり方について究明することが本研究の目的である

(対象と方法)

本研究では「エクイティ」の認識を深めるための学習内容構成のあり方について考察する。アメリカの多文化教育における「エクイティ」の位置付けとその変遷を明らかにするとともに、これにより多文化教育における「エクイティ」意識の育成が重要であることを明らかにする。この理論問題については、第一章から第三章を通じて検討し、第三章の末尾の第五節において「エクイティ」の性質をまとめることにする。次いで、従来の多文化教育研究では教育の制度的側面を主な対象としてきたのに対して、本研究では児童・生徒の学習面において「エクイティ」の認識の深化を図ることが極めて重要な課題であるという観点に立ってそのあり方を究明し、「エクイティ」意識の深化を図るための「学習モデル」を提示する。そしてその有効性の考察に当たっては、日米の教育実践を分析の対象として、授業観察調査を通して「エクイティ」の認識を深めるための学習内容構成について明らかにする。それと併せて最近のアメリカの教育改革を手がかりに、「エクイティ」が本質的にもつ欠点を是正する概念についても明らかにする。以上の研究の手順を通して、多文化社会における「エクイティ」の認識を深めるための学習モデルを構想し、その有効性を明らかにするものである。

(結果)

第一章から第三章における考察を通じて、「エクイティ教授」が多文化教育の最も中心的な課題となっていることを明らかにした。多文化社会においては集団間の平等の実現が緊急に求められているが、エクイティの達成を目指すことによってそれに迫ることができると考えられる。その際には、第二章で明らかにしたエクイティの二側面である「形式的平等」と「実質的平等」とのバランスをどう図るかが課題となる。しかし、

「エクイティ」の認識を学習において具体的にどう深めればよいかについては未解明のままであった。これが理論研究だけの研究の限界であると考え。そこで第四章では、そのための仮説を設けて、日米の小学校における授業観察を通じて、「エクイティ」の認識を深化させる学習指導のあり方を実践に即して解明しようとした。

それによれば、公立、私立という相異なる二校の授業において、「形式的平等」と「実質的平等」、「形式的扱い」と「実質的扱い」との間を行き来する形によるエクイティの認識の深化、および多面的考察の重視という共通性が見出された。このことから、これらがハワイの小学校で観察された文化理解のためのアプローチであると考え。人種・民族の関係把握には、「皆同じに」と捉える方法と「皆異なって」と捉える方法の二つがある。前者では全員に同じ処遇を求めることになるのに対して、後者では個々の多様な条件を考慮して、各々異なる処遇を求めることによって平等を実現しようとする。両者のバランスを考え、どちらをどう重視すればよいか自ら決定できる能力を養うことがエクイティ的な判断力の育成に結びつくことになり、異文化理解教育のより一層ミクロなそして今日的な課題である。

(考察)

従来、「エクイティ」は対象をマイノリティに集中しているために、マジョリティへの「逆差別」の問題を避けることができなかった。この問題を解消に向かわせる取組として、ハワイ州の「コンプリヘンシブ児童生徒支援システム」を取り上げて、その内実を明らかにすることにより「コンプリヘンシブ」という新たな平等保護観の概念把握を試みた。その特徴は、「全員が対象」かつ「個への対応（個別化）」ということができ、その実現に向けては、州教育局や教育委員会、学校の取り組みではなく、家庭と地域の協力が不可欠とされているということが明らかになった。

以上の点を踏まえて、多文化教育における「エクイティ教授モデル」の構築を試みた。バンクスの社会科における「意思決定モデル」を手がかりとして、第五章までに明らかにした「エクイティ教授」のあり方と、それを精緻化するため「コンプリヘンシブ」の考え方をモデル構築の視点として、「エクイティ教授モデル」を構想した。モデルの最終プロセスに「コンプリヘンシブ」の考え方が加わることによって、これまで未解明であった「多文化教育における多様性のバランスをどうとるか」という課題に答えられることを明らかにした。

審査の結果の要旨

本論文は多文化教育の中心課題とされる「エクイティ教授」のあり方について、理論的考察に加えて教育実践を取り上げて考察したもので、従来の研究を大きく超えた画期的なものである。とりわけ多文化教育に対して教科教育学の観点からアプローチしたことが先行研究に対してもつ独創的な点であり、論文博士としての論文としては十分なレベルにあり、高い評価をすることができる。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。